

野菜茶業研究所ニュース

No.9 2003.12

CONTENTS

表紙	● 耕畜連携実験圃場風景	1
視点	● 野菜栽培における耕畜連携の意義	2
研究情報	● ①ニンジン・ダイコン作付体系へのサトイモ導入効果	3
	● ②客土等によるハウレンソウ栽培におけるカドミウム吸収抑制	4
	● ③ハウレンソウベと病菌の新レースの発生および抵抗性品種	5
所の動き	● ①研究成果発表会	
	最新的茶業研究成果—安全・安心を目指した茶の生産—	6
	● ②課題別研究会	
	耕種的技術等を活用した野菜の高品質・高付加価値化技術の開発	6
	メロンの育種と品質に関する諸問題	6
	環境に優しい養液栽培の現状と展望	7
	● ③一般公開（金谷・武豊・安濃）	7
	● ④特許・実用新案・著作権	8
	● ⑤人の動き	9



『耕畜連携における畜産草地研究所との共同実験圃場風景』

(2 ページに関連記事)

視 点

野菜栽培における 耕畜連携の意義

野菜研究官 宍戸 良洋

はじめに

我が国において、戦後のめざましい経済成長により、物質的に豊かな社会が築かれた。その背景の一部として、農業における世界有数の高度集約型農業の発展がある。その一方で、農業地域特に集約野菜産地においては、機械化、単作化の進行と化学資材の偏重や不適切な使用等によって、農地の物理性・化学性等が劣悪化し、養分集積や物質循環機能の低下、生物相の貧困化など、生態系の劣化・土壌生産力の低下とともに、農業用水・河川・地下水汚染等、環境保全上の問題が持ち上がっていることが指摘されるようになった。

環 境 三 法

このようななか、新農業基本法が制定され、その中に、「国は農業の自然循環機能の維持増進を図るため、農薬及び肥料の適正な使用の確保、家畜排せつ物等の有効利用による地力の増進その他必要な施策を講じるものとする。」とされた。その実定法としていわゆる環境三法が公布された。以下その骨子を述べると、

1. 持続性農業法「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律」では、「農業の持続性の向上を図るため、堆肥等を活用した土作りと化学肥料及び化学農薬の使用の合理化を一体的に行う持続性の高い農業生産方式の導入を促進する措置を講じる」とされ、土作りと化学肥料・化学農薬の低減を一体的に行うなかで有機物資源として堆肥の施用が推奨された。
2. 家畜排せつ物法「家畜排せつ物の管理

の適正化及び利用の促進に関する法律」では、「畜産業における家畜排せつ物の適正な管理を確保し、資源としての有効利用をいっそう促進するための所要の措置を講ずることにより、我が国畜産の健全な発展に資する。」とされ、家畜排せつ物の有効利用の促進が唱われた。

3. 肥料取締法の一部改正法では、「環境と調和した持続性の高い農業生産方式の普及浸透を図るなか、堆肥等特殊肥料の適切な施用の促進と品質保全を進めていく。」とされ、堆肥の品質表示制度が義務付けられた。

野菜の環境負荷低減型栽培と耕畜連携

家畜きゅう肥は、畜産農家では畜産廃棄物の処理という側面を持っており、汚物処理的感覚がある。一方、耕種農家側から見ると、生産されたきゅう肥が特定地域に偏在している等の流通面及びきゅう肥の品質、利用時期、コスト等の問題が残されている。昨今の環境重視の高まりのなか、減化学肥料及び土壌地力維持、有機農産物への関心も伴って、堆きゅう肥の利用が注目されるようになった。

野菜栽培では、化学農薬による効率的防除技術の開発、施肥技術の改善によるより高い生産性が実現されてきた。しかし、化学農薬・化学肥料の大量投入による環境への影響が問題化されているなかで、生物的・物理的・耕種的防除技術を組み合わせた総合的病害虫管理技術の確立や環境負荷を低減する施肥技術の確立に向けた研究が必須となっている。

ニンジン・ダイコン作付体系へのサトイモ導入効果

研究のねらい

ニンジン・ダイコンはともにキタネグサレセンチュウの寄主作物で、連作によりセンチュウを原因とする品質低下や収量低下などの問題が発生する。一方、これらの重量野菜の販売は輸入野菜との競合等で厳しい状況におかれている。このような状況においては差別化を図るためにも、殺線虫剤等の農薬に代わり経営に取り込みやすい収益作物による環境保全的防除・生産安定技術の確立が急務である。

そこで、ニンジン・ダイコンの作付体系において、キタネグサレセンチュウの非寄主作物であるサトイモの作付けによるセンチュウ防除を含む生産安定化技術を開発する。

研究の成果

- ①キタネグサレセンチュウ被害が見られるニンジン連作畑においてサトイモを作付けすると、作付けしない場合に比べ増収する（表1 枠部分）。
- ②ニンジン連作区及びダイコン-ニンジン輪作においてサトイモを作付けする（図1）と、作付け後にキタネグサレセンチュウの密度が減少する（図2）。その効果は次年度春作作付後まで持続可能である。
- ③キタネグサレセンチュウ数の推移に施肥による差は見られない。



図1 ニンジン連作畑へのサトイモ作付

表1 作付体系毎の全収量 (t/10a) の推移

作付体系	施肥	1999年		2000年		2001年	
		春	秋	春	秋	春	秋
ニンジン 連作	化学	2.6±0.7*	5.4±0.2	2.3±0.8	4.7±1.1	1.9±0.1	3.2±1.2
	減化学	1.7±0.2	4.5±0.2	2.3±0.3	4.2±0.8	1.8±0.2	3.1±1.1
	堆肥	2.2±0.2	4.4±0.7	2.9±0.4	6.3±2.0	2.1±0.5	3.1±0.8
ニンジン 連作 (サトイモ)	化学			5.4±0.7		4.2±0.3	5.2±0.8
	減化学			5.7±0.6		3.9±0.4	3.6±0.9
	堆肥			4.5±0.8		4.6±0.5	5.3±0.9
ダイコン ニンジン輪作	化学	2.7±0.8	5.3±0.8	4.7±1.6	5.3±2.1	4.2±2.3	4.6±0.7
	減化学	2.3±0.2	5.4±0.3	4.0±0.7	5.1±0.7	4.3±2.6	5.4±1.4
	堆肥	1.9±0.5	5.7±0.1	2.9±0.4	7.1±1.4	5.2±0.3	4.8±1.2
ダイコン ニンジン輪作 (サトイモ)	化学			6.0±1.0		**	5.2±1.0
	減化学			6.0±0.7		-	5.9±2.1
	堆肥			6.5±1.1		-	6.2±1.0

*:標準偏差(n=3)
**:調査なし

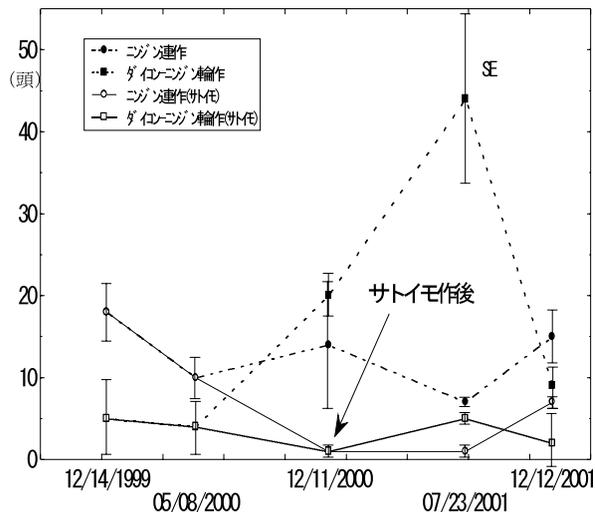


図2 土壌 20g あたりのキタネグサレセンチュウ数の推移 (n=9)

成果の活用面・留意点

- ①キタネグサレセンチュウ密度が高い畑の場合、単年度のサトイモ作付では要防除水準（ニンジン：およそ 15-20 頭 /20g 土、ダイコン：およそ 4-5 頭 /20g 土）以下まで密度が下がらず、効果が明白に現れない場合もある。
- ②用いた品種は、ニンジンでは‘向陽二号’（タキイ種苗）、ダイコンでは‘猷夏青首’（サカタのタネ）、サトイモは‘石川早生’である。

（葉根菜研究部・浦上敦子）

客土等によるハウレンソウ栽培におけるカドミウム吸収抑制

研究のねらい

食品中のカドミウム (Cd) 濃度について、新たな国際基準値案 (葉菜類は新鮮重あたり $0.2 \text{ mg} \cdot \text{kg}^{-1}$) が検討されており、日本においても早急な対応が求められているが、野菜のカドミウム吸収に関する知見は少なく、対策技術に関する研究事例も極めて乏しい現状にある。そこで、カドミウム対策技術の確立を目指すため、他の野菜と比べてカドミウムを蓄積しやすい傾向があるハウレンソウについて、根系分布との関連から、客土処理等の吸収抑制技術の効果について検証を行った。

研究の成果

- ①客土処理のモデル試験として、カドミウム汚染土壌に非汚染土壌を客土したポット (直径 30cm、深さ 60cm) でハウレンソウ (品種: 'アクティブ') を栽培したところ、客土厚が 20cm でも、吸収抑制効果は認められたが、客土厚が 40cm では、ほとんどの根が客土中に存在しており (表 1)、可食部のカドミウム濃度は非汚染土壌区と同等の値まで低下した (図 1)。
- ②客土厚が 20cm でも、透水遮根シートを客土と汚染土壌の間に敷設し、汚染土壌への根の伸長を制限することによって、ハウレンソウのカドミウム濃度を低減することが可能であった (図 2)。
- ③カドミウム汚染地帯の天地返し施工圃場で栽培されたハウレンソウのカドミウム濃度は、未対策圃場で栽培されたものの 50% 以下となり (図 3)、カドミウム吸収抑制効果が認められた。

成果の活用面・留意点

客土処理の結果は、ポット栽培条件におけるものであり、土壌条件や品種等により、根系分布は変動する可能性があるため、透水遮根シートの設置方法も含め、現場への適用には検討が必要である。
(葉根菜研究部・菊地直)

表 1 ハウレンソウの根系分布

	根長 (%)			根表面積 (%)		
	客土層	汚染土層	(%)	客土層	汚染土層	(%)
40cm客土区	98	2	(98)	99	1	(99)
20cm客土区	47	53	(92)	43	57	(94)

()内は0~40cmの根の割合
 汚染土壌 (塩酸抽出Cd: $5.22 \text{ mg} \cdot \text{kg}^{-1}$, pH7.4, レキ質黄色土)
 40cm客土区: 客土層 40cm、汚染土層 20cm
 非汚染土壌 (同: $0.10 \text{ mg} \cdot \text{kg}^{-1}$, pH6.2, 黒ボク土)
 20cm客土区: 客土層 20cm、汚染土層 40cm
 各区3個体の平均値

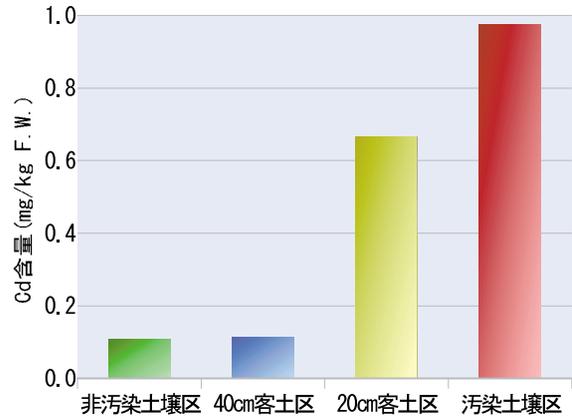


図 1 ハウレンソウの Cd 濃度に対する客土厚の影響

汚染土壌 (塩酸抽出Cd: $5.22 \text{ mg} \cdot \text{kg}^{-1}$, pH7.4, レキ質黄色土)
 非汚染土壌 (同: $0.10 \text{ mg} \cdot \text{kg}^{-1}$, pH6.2, 黒ボク土)

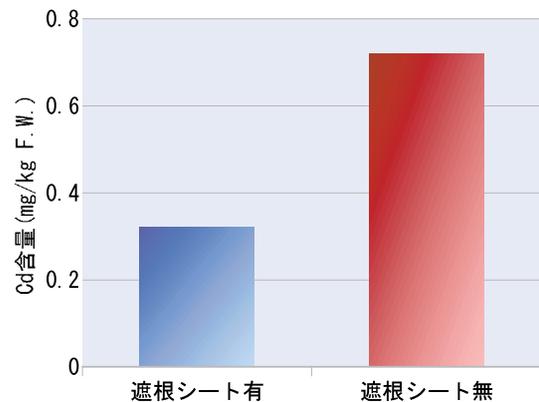


図 2 ハウレンソウの Cd 濃度に対する透水遮根シート設置の影響

汚染土壌 (塩酸抽出Cd: $5.22 \text{ mg} \cdot \text{kg}^{-1}$, pH7.4, レキ質黄色土)
 客土 (同: $0.10 \text{ mg} \cdot \text{kg}^{-1}$, pH6.2, 黒ボク土)
 客土厚 20cm

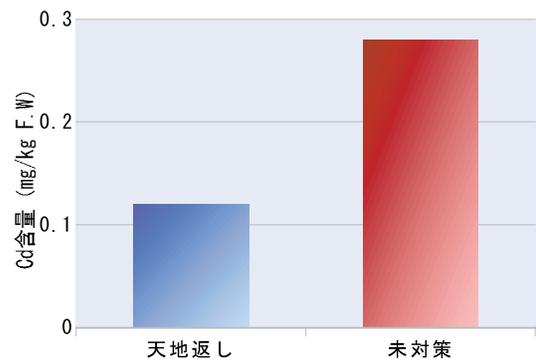


図 3 ハウレンソウの Cd 濃度に対する天地返しの効果

天地返し圃場 (転作田、反転土層 50cm、表層土 0.1M 塩酸抽出Cd: $0.17 \text{ mg} \cdot \text{kg}^{-1}$, pH 6.0)
 未対策圃場 (同: $1.49 \text{ mg} \cdot \text{kg}^{-1}$, pH 7.9)

ハウレンソウべと病菌の新レースの発生 および抵抗性品種

研究のねらい

ハウレンソウべと病菌 (*Peronospora effusa*) は、これまでにレース4までの発生が知られており、レース1～4に対する抵抗性品種の利用によって防除してきた。しかし、そのレース1～4に抵抗性の品種にべと病の発生が確認されたため、病原菌のレース検定を行う。また、日本での広がりを把握するとともに、抵抗性品種を明らかにする。

研究の成果

①2000年2月、ハウレンソウべと病菌レース4抵抗性品種に発生したべと病は、これまでに報告がない新レースであった (図1、表1)。

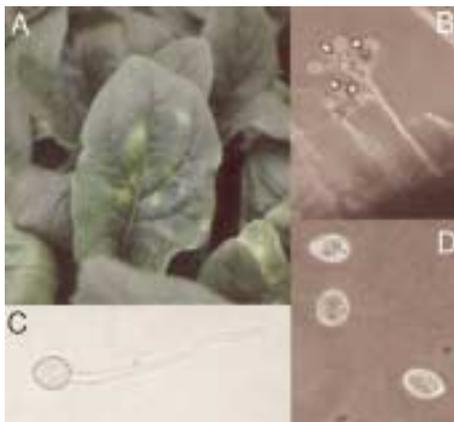


図1 ハウレンソウべと病菌レースによる病徴と病原菌
A: 品種パロールの病徴、B: 葉上の分生子柄及び分生子
C: 分生子、D: 発芽した分生子

表1 ハウレンソウ判別品種に対するべと病菌レースの反応

レース抵抗性 (種苗会社による)	品種	本業での発病株率および抵抗性の判定			
		SOP4 (レース3)	SOP7 (レース4)	SOP9 ^{a)} (新レース)	SOP11 ^{a)}
なし	おかめ	S ^{a)}	S	S	S
なし	豊稔	S	S	S	S
1	パレード	S	S	S	S
1	パルク	S	S	S	S
1,2	アトラス	S	S	S	S
1,3	リード	R	S	R	R
1,3	強力オーライ	R	S	R	R
1,2,3,4	ジョーガー	R	R	S	S
1,2,3,4	アールフォー	R	R	S	S

a) 2000年2月の発病株から接種した菌株
S: 感受性、R: 抵抗性

②秋田、宮城、茨城、群馬、千葉、福井、広島、徳島の計8県で新レースが確認された (表2)。

表2 国内から採取したハウレンソウべと病菌のレース検定

採集地 (分離した品種)	分離年月	菌株数	べと病菌菌株	
			レース判定	＝
秋田県若美町 (アールフォー)	2001, 3	1	新	
宮城県鹿角市 (アールフォー)	2001, 3	1	新	
茨城県鹿嶋市 (マグワイセ)	2001, 12	1	新	
群馬県倉田町 (ビゴラ、アトラス)	2002, 4	2	新	
千葉県千葉市 (プラトン)	2002, 4	1	新	
福井県福井市 (パルク、アトラス)	2000, 2	4	新	
広島県広島市 (シーバス)	2002, 4	1	新	
山口県美祿市 (パルク、アトラス)	2001, 3～4	2	4	
山口県秋芳町 (パンドラ)	2001, 3～4	2	3	
香川県仲南町 (リード)	2001, 3	1	4	
徳島県徳島市 (E1パルク、ビゴラ)	2002, 3	1	新	

a) 新: 新レース、3: レース3、4: レース4

③べと病菌各レースを市販品種に接種した結果、‘エーデルワイズ’、‘躍太郎’、‘勇太郎’、‘マジック’では、レース3、レース4および新レースの全てにおいて発病は認められなかった (表3)。

表3 ハウレンソウ品種のべと病菌レースに対する抵抗性

品種反応 グループ	品種数	べと病菌レース		
		レース3	レース4	新レース
A ^{a)}	4	R ^{b)}	R	R
B	43	R	S	R
C	12	R	R	S
D	4	S	R	R
E	2	S	R	S
F	8	R	S	S
G	71	S	S	S

a) 品種反応グループAの品種: エーデルワイズ、躍太郎、勇太郎、マジック
b) R: 抵抗性、S: 感受性

成果の活用面・留意点

べと病の新レースが発生し、日本全国で拡大していることの周知が必要である。また、抵抗性品種の利用により、ハウレンソウべと病の発生を防ぐことが可能となる。(葉根菜研究部・佐藤 衛*)

* 現: 果菜研究部

所の動き

研究成果発表会「最新の茶業研究成果—安全・安心を目指した茶の生産—」

標記成果発表会は、茶の安定的な生産と新たな需要を喚起することを目的として、10月16日、金谷茶業研究拠点のある静岡県金谷町の「夢づくり会館」において開催された。

近年、茶には人の健康保持に有益な成分が含まれていることが明らかにされ、新たな需要が喚起されている。しかし、一方で、多肥による周辺環境の汚染、病虫害防除のための多量の農薬散布などのマイナスイメージもある。これらの問題に対する野菜茶業研究所の取り組みについて、最新の研究成果の講演発表、パネル・現物での紹介、試飲などが行われ、約230名が参加した。

講演は、乗用型送風式捕虫機の開発、被覆尿素等による減肥技術、品種識別技術など7課題が行われ、いずれも聴講者から多くの質問が出され（写真）、改めてこれら諸問題に対する茶業界や消費者の関心の高さを感じた。

並行して行われた当所育成品種の‘さえみどり’他2品種の試飲では、多くの参加者が特徴ある香りと味を楽しんだ。展示関係では、研究成果パネルと当所育成品種等の鉢植えを興味深げに見る人が多く、また、屋外での「乗用型送風式捕虫機」には、参加者の約半数にのぼる見学者があり、やはり目で見る研究成果紹介も有効であると再認識した。

現在、食の「安全・安心」が謳われる中、これをテーマに今回成果発表会を開催したことは、非常に有意義かつ有効であったと思われた。

（企画調整部・池杉美知男）



課題別研究会「耕種的技術等を活用した野菜の高品質・高付加価値化技術の開発」

消費ニーズが多様化する中、わが国の野菜消費が伸び悩み、野菜産地からは高品質化・高付加価値化技術の開発に対する要望が一段と強まっている。耕種的技術は育種技術に比べ即応技術としての有用な側面がある。このため、10月15、16日に茨城県つくば市つくば農林大ホールにて、耕種的技術を中心に野菜の高品質・高付加価値化技術の展開方向を検討する標記の研究会が開催された。本課題別研究会は平成15年度「新鮮でおいしい『ブランド・ニッポン』農産物提供のための総合研究6系野菜」戦略会議としても位置づけられ、都道府県、大学、民間、独法より関係者約200名の参加があり、関心の高さが感じられた。

1日目は高品質野菜生産技術開発の現状について、東北農業研究センターの森山真久氏が東北地域の立地条件を活用した「寒じめ菜っば栽培方法」を、野菜茶業研究所の東尾が「紫外線を利用した機能性成分の増強技術」を、同浦上敦子が「減農薬のための物理的・耕種的害虫防除技術」を報告した。また、千葉県農業総合研究センターの松丸恒夫氏は「減化学肥料化のための生産技術」、富山県農業技術センターの西畑秀次氏はマーケティング手法による「コンパクト野菜の生産技術」、北海道立道南農業試験場の土岐和夫氏は「収穫時刻と野菜品質」について報告した。

2日目は、はじめに野菜茶業研究所の山下市二より「これまでの野菜品質研究の歩み」について報告があり、同穴戸良洋よりプロジェクト研究「ブランド・ニッポン」で取り組む研究概要が紹介された。続いて、トマト生産者の大山寛氏、コープこうべの伊藤潤子氏、株式会社サラダクラブの本間一男氏、東京青果株式会社川口勤氏より、野菜の品質研究に期待する意見が述べられた。その後、野菜茶業研究所長石内傳治の司会で、前記の6氏に、青森県農林総合研究センターの菊池昌彦氏と福岡県農業総合試験場の林三徳氏がパネラーとして加わり、「これからの高品質野菜の技術開発」についてパネルディスカッションが行われた。会場からの質問も多く、「消費ニーズの多様化に対応した技術開発をいかに進めるか」について予定時間を過ぎるほど熱心な意見交換が行われた。

（葉根菜研究部・東尾久雄）

課題別研究会「メロンの育種と品質に関する諸問題」

メロンの生産および消費は平成2年をピークに低迷している。そこでメロンの育種と栽培技術の展開方向について討議を行うことを目的に、10月21、22日に三重県総合文化センターにおいて、(社)日本種苗協会との共催で、標記の課題別研究会が、約140名の参加により開催された。

初日の全体会議では、まず、日種協の金子英人氏、初田和雄氏、近藤宏氏、伊藤智司氏から欧米、日本・アジアの種苗産業の動向について解説された後、日本園芸生産研究所の平林哲夫氏からメロン育種の歴史と、今後の育種の方向について提案された。また、大果大阪青果の堀ノ内重治氏から市場から見た「商品」としてのメロンについて話題が提供された。さらに、新品種について試食を交えながら意見交換を行った(写

真)。2日目の育種分科会ではえそ斑点病、つる割病、うどんこ病抵抗性育種について、野菜茶業研究所の杉山充啓、北海道立花・野菜技術センターの八木亮治氏、茨城県生物工学研究所の葛谷真輝氏からそれぞれ話題が提供された。品質分科会では千葉県暖地園芸研究所の大泉利勝氏から高品質化栽培技術について解説され、筑波大学の江面浩氏、食品総合研究所の杉山純一氏から日持ち性、熟度・糖度に関する最新の情報が提供された。最後の総合討論ではメロン生産・消費を回復するための今後の新しい抵抗性育種・技術開発について論議され、進むべき方向について理解を深めることができた。
(果菜研究部・坂田好輝)



課題別研究会「環境に優しい養液栽培の現状と展望」

野菜茶業課題別研究会、「環境に優しい養液栽培の現状と展望」は、10月23、24日、大学、関連業者等140名の参加者を得て武豊町中央公民館にて開催された。研究会は、養液栽培の問題点、環境に優しい養液栽培法開発にともなう技術的課題や環境に優しい養液栽培導入時の経営的問題点を明らかにし、未来の環境に優しい養液栽培システムを探求して今後の研究展開方向を示すことを目的とした。この課題に8氏が話題を提供した。



千葉大学園芸学部の篠原温氏は、環境に優しい養液栽培の開発指針と展望について、鳥取県農政課の松岡昭博氏は、大規模栽培における養液栽培の現状と経営的展望について問題点を集約した。

環境に優しい養液栽培の技術的問題点である培養液の循環利用時における殺菌方法を大阪府立食とみどりの総合技術センターの草刈真一氏、神奈川県農業総合研究所の深山陽子氏は、光触媒による培養液の殺菌を紹介した。愛知県東三河農業研究所の加藤俊博氏は培養液の排出処理技術を紹介した。

環境に優しい養液栽培の事例を、栃木県農業試験場栃木分場の稲葉幸雄氏が、余剰廃液を出さないイチゴ養液栽培(写真)、三重県科学技術振興センターの磯崎真英氏は、余剰廃液を循環利用したトマトの養液栽培、野菜茶業研究所の細井徳夫は、肥料要素の量的制御によるNPKの残留がないトマト循環型養液栽培を紹介し、問題点を指摘した。

これらの話題提供をもとに、環境に優しい養液栽培の確立のため、温室の構造と環境調節法、病虫害総合防除法や作物残さの有効利用法、養液栽培の培地、閉鎖循環型栽培法、培養液の殺菌、培養液排出処理技術など総合討議は時間を延長し、活発に論議された。
(果菜研究部・細井徳夫)

一般公開開催

金谷茶業研究拠点

「自然と人にやさしく かわります日本の茶業」をキャッチフレーズに9月10日(水)、野菜茶業研究所と種苗管理センター金谷農場合同の一般公開が、金谷で開催された。

当日は開場時の雨も途中であがり、県内外から約600名の参観者が訪れた。メイン会場では研究内容のパネル展示をはじめ、茶園土壌・茶葉の成熟度診断、茶の成分分析を実施し、技術相談コーナーでは病虫害や土壤肥料に関する茶農家からの質問に対応した。特に今回一般に初公開となった「乗用型送風式捕虫機」の実演(写真)では、多くの生産者らの興味をひき、担当者に盛んに質問が出されていた。また、恒例となっている手揉み実演と当所で育成した品種「ふうしゅん、りょうふう」の試飲コーナーも人気を集めた。その他昨年と同様に、武豊からの参加を得て果菜類の展示紹介とトマトの試食を行い、安濃からは葉ボタンの提供があり、本行事に花を添えた。
(企画調整部・池杉美知男)



所の動き

武豊野菜研究拠点

平成 15 年度の一般公開は、『野菜を楽しむ！～「人と野菜と環境」の融和～』のテーマの下で 10 月 9 日（木）に開催された。研究展示として、ベランダで栽培可能な簡易養液栽培装置、土壌病害の新しい防除法、ナスの収穫ロボット、環境に優しい養液栽培、植物形状と受光量の 3 次元モデルなどを紹介した。

例年実施していたメロン試食の代わりに、本年は高糖度トマトの試食およびトマト料理の紹介（レシピ配布と調理実演）を行った（写真）。農機具展示コーナーでは、トラクターや高所作業車、運搬車などを展示した。温室案内では、見学出発前にテーマに関連したミニ講演を行い、その後、実験ハウス（電解水による病害防除試験、近赤外線カットフィルム試験、高軒高ハウスと環境にやさしい養液栽培、土壌消毒試験）を説明した。

果菜部病害研と虫害研の協力を得て園芸相談を、金谷茶業研究拠点の協力を得てお茶の研究パネル展示とお茶試飲を実施した。その他、東海農政局統計・情報センターによる展示、社会福祉法人「わっぱの会」による農産加工品販売を行った。当日は好天で、来所者数は一般 337 名、幼稚園関係（芋掘り）397 名、合計 734 名であった。



本所（安濃）

一般公開は 10 月 18 日（土）秋晴れの下、1000 人を超えるお客様を迎えて盛大に行われた。各研究成果の展示コーナーでは、研究員の説明に熱心に聞き入る人や質問をする人も見受けられた（写真）。技術相談コーナーでは農作物を手にした大勢の人が病虫害についての助言を求めて集まったため一時的に相談員を増やす一幕もあった。また、当所で開発した種無しスイカ・カボチャ・キュウリの試食及びお茶の試飲コーナーでは大勢の人が味と香りを楽しんでいた。



特許・実用新案・著作権

(1) 登録済み特許・実用新案・著作権

(平成 15 年 8 月 1 日～平成 15 年 10 月 31 日)

種類	件名	発明者	登録番号	登録年月日	備考
特許権	害虫防除剤及び害虫抵抗性植物	篠田徹郎、中山真義、河合 章、腰岡政二、芹沢啓明（長野県野菜花き試験場）、白井富太（長野県野菜花き試験場）、中沢 斉（長野県植物防疫協会）	3455513	平成 15.7.25	
特許権	茶製造装置	吉富 均、深山大介、角川 修、寺田勝二（㈱寺田製作所）、榊原吉浩（㈱寺田製作所）	3455796	平成 15.8.1	

(2) 出願中の特許・実用新案・著作権

(平成 15 年 8 月 1 日～平成 15 年 10 月 31 日)

種類	件名	発明者	出願番号	出願年月日	備考
特許権	花粉症抑制茶葉、ティーバッグ及び花粉症抑制組成物	山本万里、永井 寛（アサヒ飲料㈱）	2003-290789	平成 15.8.8	
特許権	イチゴの品種識別方法	國久美由紀、松元 哲、吹野伸子	2003-337714	平成 15.9.29	

人の動き

● 異動関係

(平成15年8月2日～平成15年10月31日)

発令年月日	氏名	新所属	旧所属
※15.4.1	川嶋 浩樹	果菜研究部主任研究官(栽培システム研究室)	果菜研究部(栽培システム研究室)
	深山 大介	茶業研究部主任研究官(作業技術研究室)	茶業研究部(作業技術研究室)
	布目 司	機能解析部主任研究官(育種工学研究室)	機能解析部(育種工学研究室)
	吹野 伸子	機能解析部主任研究官(遺伝特性研究室)	機能解析部(遺伝特性研究室)
15.8.18	若生 慎子	育児休業(平成16年5月31日まで)	総務部会計課(会計係)
	澤岸真奈美	総務部会計課(会計係)	臨時的任用(平成16年5月31日まで)
15.9.15	大森 弘美	退職(生物系特定産業技術研究推進機構)	果菜研究部(作業技術研究室)
15.10.1	保科 次雄	企画調整部長	茶業研究部長
	吉津 泉	企画調整部養成研修課長	果樹研究所総務部庶務課課長補佐
	牧 武久	総務部金谷総務分室長	農林水産省農林水産技術会議事務局総務課人事係長
	秋田 弘	農業・生物系特定産業技術研究機構統括部施設課課長補佐	総務部金谷総務分室長
	佐藤 隆徳	葉根菜研究部アブラナ科育種研究室長	独立行政法人国際農林水産業研究センター生物資源部主任研究官
	本多健一郎	果菜研究部虫害研究室長	中央農業総合研究センター企画調整部連絡調整室室長補佐(企画班担当)
	鈴木 徹	葉根菜研究部主任研究官	葉根菜研究部アブラナ科育種研究室長
	秋田 滋	果樹研究所カンキツ研究部病害研究室長	茶業研究部病害研究室長
	袴田 勝弘	茶業研究部長事務取扱	茶業研究官
	袴田 勝弘	茶業研究部病害研究室長事務取扱	茶業研究官
	渡辺 慎一	育児休業(平成16年1月30日まで)	果菜研究部主任研究官(栽培システム研究室)
	大森 弘美	果菜研究部(作業技術研究室)	採用(生物系特定産業技術研究推進機構)
	山田 朋宏	果菜研究部(ナス科育種研究室)	選考採用
	岡本 毅	茶業研究部主任研究官(育種素材開発チーム)	選考採用
	萩森 学	機能解析部環境ストレス研究室長	選考採用
	水上 裕造	茶業研究部(製茶システム研究室)	任期付研究員(平成20年9月30日まで)
	菊地 郁	機能解析部(生育生理研究室)	任期付研究員(平成20年9月30日まで)

※遡及発令

● 学 位

(平成15年8月1日～平成15年10月31日)

種別	氏名	所属	論文名	提出大学	年月日
農学博士	白川 隆	葉根菜研究部	スイカ果実汚斑細菌病に関する研究	新潟大学	H15.9.25

● 海外出張・派遣

(平成15年8月1日～平成15年10月31日)

所属	氏名	目的	行き先(国名)	期 間
機能解析部	伊藤 秀和	園芸生産における植物成長モデルと品質制御に関する国際ワークショップ	ドイツ	H15.8.22～H15.8.29
機能解析部	今西 俊介	果実の発育・成熟におけるジャスモン酸類の影響	イタリア	H15.8.25～H15.9.17
機能解析部	山下 市二	国際園芸シンポジウム参加及び基調講演	大韓民国	H15.9.29～H15.10.4
葉根菜研究部	佐藤 文生	アメリカ園芸学会100周年記念大会	米国	H15.10.2～H15.10.8
葉根菜研究部	川頭 洋一	アメリカ園芸学会100周年記念大会、研究打合せ	米国	H15.10.2～H15.10.12
果菜研究部	佐藤 衛	ガーナ灌漑小規模農業振興計画に係る短期派遣専門家(野菜の病虫害防除)	ガーナ	H15.10.19～H15.12.20

● 外国人受入研究員

(平成15年8月1日～平成15年10月31日)

氏名	所属	受入れ研究室名	課題名	期 間
Mr. Victor Emesto Aparicio Ramirez	エル・サルバドル国立農牧林業技術センター	果菜研究部・環境制御研究室	簡易土壌診断法、病虫害診断と防除法、研究と普及の連携及び農家視察	H15.9.29～H15.10.29

● 特別研究員等

(平成15年8月1日～平成15年10月31日)

項目	氏名	受入れ研究室名	課題名	期 間
農研機構特別研究員	寺岡 秀興	葉根菜研究部・土壌肥料研究室	家畜糞尿を原料とする有機質資源の安全性を評価	H15.10.2～H16.3.31
農研機構特別研究員	森脇佐和子	機能解析部・茶機能解析研究室	茶葉中抗アレルギー成分の利用技術の開発	H15.10.2～H16.3.31

人の動き

● 依頼研究員

(平成15年8月1日～平成15年10月31日)

所 属	氏 名	受入れ研究室名	課 題 名	期 間
富山県高岡農業改良普及センター	奥野 善久	葉根菜研究部・作型開発研究室	野菜の機械化省力栽培技術改善・開発に関する研究	H15.9.1～H15.11.28
愛知県農業総合試験場	大川 浩司	果菜研究部・栽培システム研究室	単為結果性トマトの着果に及ぼす環境要因の影響	H15.9.1～H15.11.28
新潟県農業総合研究所	種村 竜太	果菜研究部・栽培システム研究室	トマト低環境負荷型養液栽培技術の確立	H15.9.1～H15.11.30
福島県農業試験場	太田 弘志	果菜研究部・環境制御研究室	施設野菜における環境保全型農業確立に向けた施肥管理技術の確立	H15.9.1～H15.11.28
岐阜県中濃地域農業改良普及センター	浜崎 健司	果菜研究部・病害研究室	土壌病害全般を対象とした土壌消毒技術	H15.9.1～H15.10.31
高知県農業技術センター	下八川裕司	果菜研究部・虫害研究室	果菜類害虫に対する天敵利用	H15.9.1～H15.11.28
茨城県農業総合センター生物工学研究所	葛谷 眞輝	機能解析部・遺伝特性研究室	耐病性DNAマーカー探索技術	H15.9.1～H15.11.30
鹿児島県曾於農業改良普及センター	田布尾尚子	茶業研究部・土壌肥料研究室	茶樹における施肥法に応じた地下部の動態と地上部生育特性との関係	H15.9.8～H15.11.7
宮崎県総合農業試験場	松尾 啓史	機能解析部・茶品質化学研究室	茶の製造と化学成分分析技術	H15.9.16～H15.12.15
徳島県立農林水産総合技術センター	中野 理子	果菜研究部・病害研究室	野菜病害防除対策の確立	H15.9.22～H15.12.19
熊本県農業研究センター	猿渡 真	機能解析部・育種工学研究室	ナスの品質・成分に関する遺伝的解析法	H15.9.24～H15.12.22
三重県科学技術振興センター	喜多嶋秀之	機能解析部・茶機能解析研究室	茶に含まれる機能性成分の探索及び分析	H15.9.27～H15.12.26
岩手県農業研究センター	桐山 直盛	葉根菜研究部・病害研究室	レタス腐敗病菌検出法の開発	H15.10.1～H15.12.26
秋田県農業試験場	藤井 直哉	葉根菜研究部・病害研究室	セリ細菌病の分類と同定手法	H15.10.1～H15.12.25
群馬県農業技術センター	小林 修武	果菜研究部・栽培システム研究室	イチゴの低温による奇形果発生要因の検討	H15.10.1～H15.12.26
鳥取県園芸試験場	白岩 裕隆	機能解析部・生育生理研究室	ネギの花芽分化抑制に関する基礎的研究	H15.10.1～H15.12.26
愛媛県八幡浜中央地域農業改良普及センター	宮崎 功	茶業研究部・育種研究室	茶の高品質化・軽作業化・低コスト化生産技術の習得	H15.10.21～H16.1.20

● 技術講習

(平成15年8月1日～平成15年10月31日)

所 属	氏 名	受入れ研究室名	課 題 名	期 間
岐阜大学大学院農学研究科	佐竹 薫	果菜研究部・病害研究室	サリチル酸、ジャスモン酸の定量方法の習得	H15.8.1～H16.6.30
岐阜大学農学部	森 有史	果菜研究部・栽培システム研究室	トマトの低段栽培と被覆資材の特性調査	H15.8.25～H15.8.29
岐阜大学農学部	久村 和也	果菜研究部・生育特性研究室	トマトの養液栽培	H15.8.25～H15.8.29
岐阜大学農学部	小澤 庄司	果菜研究部・環境制御研究室	トマトの育苗	H15.8.25～H15.8.29
岐阜大学農学部	岡田 尚子	果菜研究部・環境制御研究室	青枯病検定試験	H15.8.25～H15.8.29
熊本県農業研究センター	野田 孝博	機能解析部・遺伝特性研究室	DNA分析によるイチゴ品種識別についての関連技術	H15.8.26～H15.8.28
佐々木製茶株	松浦 英人	機能解析部・茶品質化学研究室	茶の香味成分の機器分析	H15.10.1～H15.11.30

お知らせ

10月1日から法人の名称が「独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構」に変わりました。



野菜茶業研究所ニュース第9号【2003年(平成15年)12月発行】

編集・発行 独立行政法人 農業・生物系特定産業技術研究機構 野菜茶業研究所
〒514-2392 三重県安芸郡安濃町大字草生360番地

TEL.059(268)4626(情報資料課) FAX.059(268)3124 Web URL:<http://vegetea.naro.affrc.go.jp/>